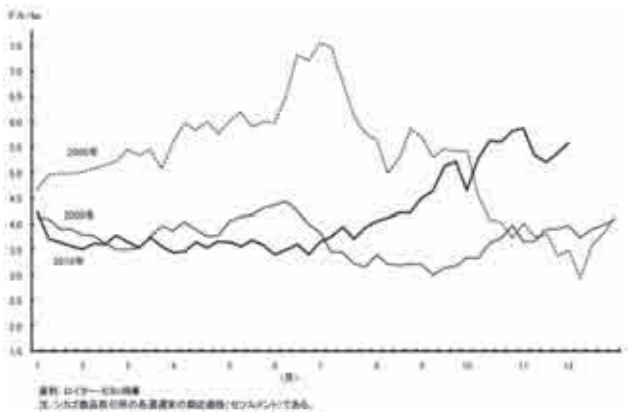


今後の相場動向について

■現在までの価格推移 (とうもろこし)

2009年は世界同時不況による需要減少が見込まれるなか軟調に推移していたが、3月以降は作付け遅れ・原油価格の上昇によりやや値を上げた。その後天候回復により軟化したものの10月以降は再び産地天候不順により値を上げる展開となった。

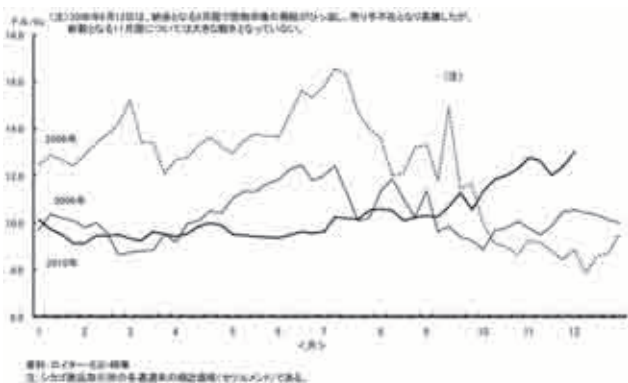
2010年は米国及び南米の豊作見通しから値を下げて推移していたが、7月以降は旧穀在庫の減少・ロシア及び近隣諸国の干ばつを材料に反騰。加えて10月には新穀生産量が大幅に下方修正されたことから騰勢を強め、年末には6.2ドル/ブッシェルを超えて上昇した。



(大豆)

2009年はアルゼンチンの干ばつ・旺盛な中国需要により6月には12.0ドル/ブッシェルを超える水準まで高騰した。その後は、好悪材料に敏感に反応するボラティリティの高い相場展開が続いた。

2010年は、米国及び南米での豊作見通しから軟調に推移していたが、7月以降は小麦の高騰から値を上げた。その後も旺盛な中国需要・新穀生産量の下方修正・

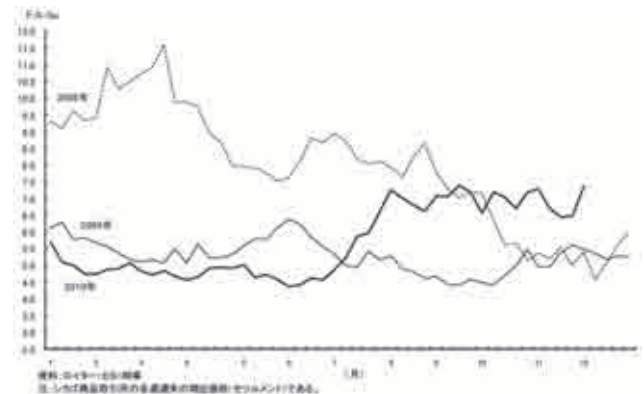


アルゼンチンの高温乾燥懸念などにより年末には13.9ドル/ブッシェル台まで値を上げた。

(小麦)

2009年は前年の価格高騰による増産から需給緩和により総じて軟調に推移した。

2010年も世界生産量が3年連続で需要量を上回るの見通しから値を削る展開が続いていたが、7月以降はロシア干ばつによる禁輸措置から反騰し、7.0ドル/ブッシェルを超えて上昇した。



■2010/2011年の需給見通し (1月米国農務省)

2010/11年のとうもろこし需給は、世界的には前年並みの生産量が見込まれるものの、米国については8月の猛暑による単収悪化から前年比4.9%の減産見通しとなった。需要面においては、依然堅調なエタノール需要から米国・世界とも前年比3.0%弱の増加見通

(とうもろこし)

	米 国	前年比	世 界	前年比
生産量	12,447	95.1%	816	100.5%
需要量	13,430	102.8%	836	102.9%
期末在庫率	745 5.5%	43.6% △7.5	127 15.2%	86.3% △2.9

(大豆)

	米 国	前年比	世 界	前年比
生産量	3,329	99.1%	255	98.2%
需要量	3,355	99.8%	353	106.7%
期末在庫率	140 4.2%	92.7% △0.3	58 16.5%	96.8% △1.7

(小麦)

	米 国	前年比	世 界	前年比
生産量	2,208	99.5%	645	94.6%
需要量	2,476	122.7%	665	102.1%
期末在庫率	818 33.0%	83.8% △15.5	177 26.8%	90.2% △3.5

(米国：百万ブッシェル、世界：百万トン)

しであり、期末在庫はいずれも減少見通しとなっている。特に米国期末在庫は5.5%と史上2番目の低水準にある。

大豆需給については、米国・世界とも前年比微減の生産量となるものの、依然世界を席卷する中国需要により期末在庫はいずれも減少、特に米国在庫は4.2%と厳しい需給環境となっている。

小麦需給は、ロシア及び近隣諸国の干ばつにより世界生産量が前年比5.4%の減産となり期末在庫も減少するが、在庫率は米国33.0%、世界26.8%といずれも安定水準を確保する見通しである。

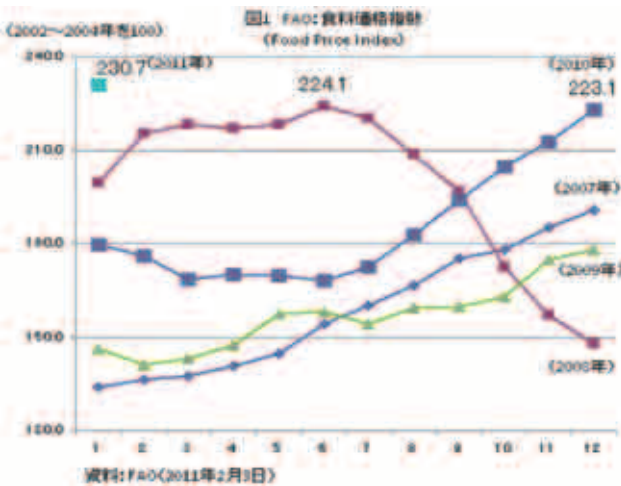
■騰勢強める穀物価格

上述のとおり2010/11年の穀物需給は非常に厳しく年明け以降もアルゼンチンの干ばつ・オーストラリアの洪水といった天候要因からますます騰勢を強めている。

未曾有の価格高騰となった2008年は、Bric'sをはじめとする新興国需要の増加や国際的なバイオエネルギー需要の増加が予想される一方、異常気象による生産量の不確実さの高まりなどから大量の投機マネーが流入し価格を押し上げた。今回の価格高騰においては投機的な動きもさることながら、当時と比較しても需給が逼迫しており、より深刻な状況といえる。

国連食糧農業機関(FAO、2月3日付)の発表でも、2011年1月の食料指数(小麦・とうもろこし・米・油糧種子・乳製品・砂糖及び食肉の国際価格について2002~2004年を100とし食品全体の平均価格を指数化したもの)は、7ヵ月連続で上昇し230.7ポイントとなり、すでに近年のピークである2008年6月の224.1ポイントを上回る水準となっている。

今後、新穀の作付け面積動向・生育期の天候動向によっては、更なる価格高騰が懸念される。

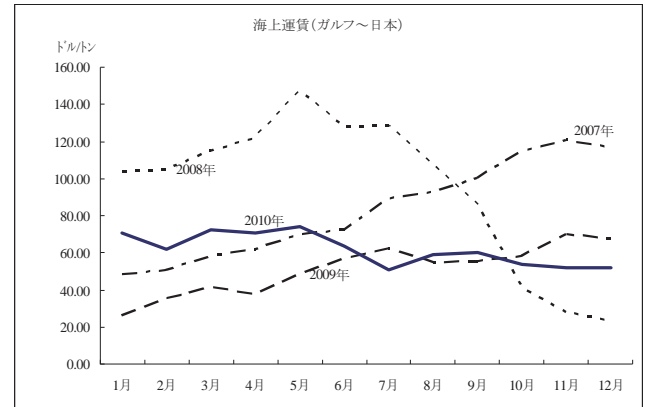


■海上運賃

リーマンショック(2008年9月)以降冷え込んだマーケットは、中国による驚異的な輸送需要により急回

復し、2009年後半には70ドル/トン前後まで値を戻した。2010年は新造船の大量供給により船腹需給の緩和が期待されていたが、実際には6割程度の供給に留まったことからマーケットへの影響は限定的となった。

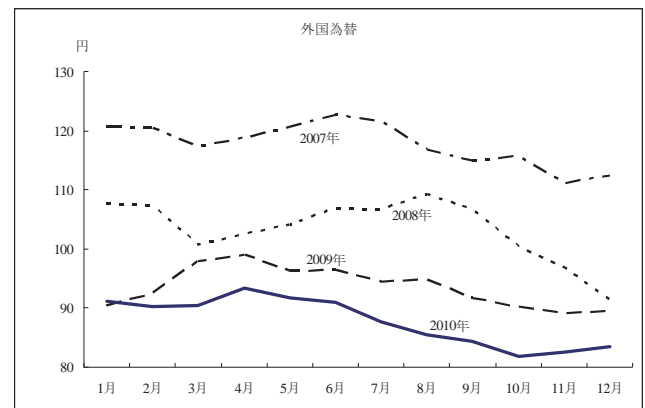
2011年は引き続き新造船の供給が見込まれており船腹需給の緩和を期待したいが、アジアへの需要集中により配船パターンが変化しており、航行日数増加により、なかなか下がり難い環境が予想される。



■外国為替

2009年は年明け以降日本の経済指標の悪化・米景気楽観論の台頭から円ジリ安の展開となったが、春先以降は再び円高基調に転じた。2010年はユーロ圏の財政問題が深刻化し、夏から秋にかけて急速に円高が進行し一時80円台を至現した。

2011年は年央までは米国の長期国債買い入れプログラムが予定通り継続される見通しであることから引き続きドルの上値が重い展開が予想されるが、年後半へ向けては米景気回復の鮮明化とともに100円程度への円安展開が予想されている。



以上のとおり、2011年は厳しい相場展開を予想せざるを得ない状況であり、中長期的にも世界の穀物需給は極めて厳しく、国産飼料の増産など対応への施策が求められる。

以上
(飼料原料課長 浅井 学)